三斎流
九曜会だより

発　行
三斎流九曜会
会長　小林祥泰
事務局　出雲市今市町53

新型コロナウイルス感染防止対策緩和
九曜会事業・大寄せ茶会
再開される

松江城大茶会

一畑薬師茶会

早春の茶会

講習会

出雲大社大茶会

詳細は後述

九曜会事業報告
〈令和四年七月～令和五年六月〉

○総会

令和四年七月十七日（日）
ホテル武志山荘

三年ぶりとなる総会が、事前に参会者を募り、時間を短縮、感染防止対策を万全にして開催されました。

小林会長、宗浦家元の挨拶の後、令和三年度九曜会事業・会計決算報告、並びに令和四年度事業計画・予算が審議、承認されました。

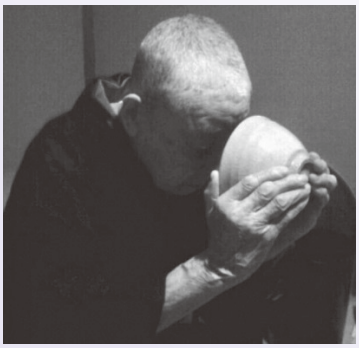
長寿のお祝いが贈呈され、会話自粛の中にも明るい雰囲気の総会となりました。

続いて宗浦家元のご講話「書状から読み解く利休の晩年について」を拝聴しました。

4ページへ続く

前々回、前回と、私がお仕えしておりました表千家堀内宗心宗匠を追懐してまいりました。今回も、もう少し思い出を語りたいと思います。

いつもの様に、誰も観光客のいない嵯峨野の景色を見ながら、庭掃除をして朝食を済ませますと、私は火を起こし釜を掛けます。その後、お茶を濾し稽古場の準備をしながら、お道具をじっくり拝見



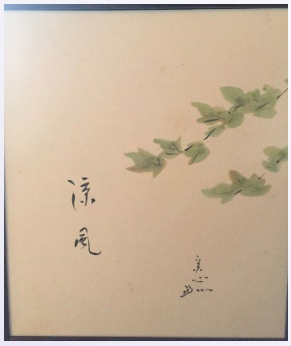
します。この時間、宗心宗匠は机に向かい、なにやら書き物をしておられます。

宗匠の奥様が、「ボクちゃん、お茶にするからダー様呼んできて」と言われます。（ちなみに、宗心宗匠はダー様、私はなぜかボクちゃんと呼ばれていました）。宗匠に、「お茶にしますので」とお声を掛けますと、走らせているペンを停めずに、「あっそうですか」と仰います。それから四分するとお部屋から出てこられます。「あっ、私が練ります」と宗匠は仰いますが、端からそのつもりの奥様と私は宗匠にお任せして、お菓子をいただきます。

「とにかく、濃茶を練る時はゆっくりと茶筅を……」と口を開かれますと、奥様が少しだけ不機嫌そうに、「そろそろお稽古の方がお見えになるわよ」と、切り返されます。すると、「あっそうですか、まだ来やしません……」と、少しだけ笑顔でお答えになります。

さて、ある日はこのあと蔵にお道具の出し入れをすることもあります。とは言え、蔵は内弟子であっても立ち入る事は出来ません。蔵の入口までお道具を運び、一つ一つ手渡していきます。

当時私は、蔵の中にはもちろん入った事はありませんでしたが、どの辺りに何があるのか、ほぼわかっていました。それは、私が手渡したお道具を、宗匠の歩かれる音や、棚のような所に置く音、プラスチックのケースのようなものにしまう音などを入口で聞いていたからでしょう。


宗心宗匠筆

二年後、宗匠が少し御足を気にされ、特別に蔵の中に入りお近くまでお道具をお持ちした時、やはり想像通りでありました。

そろそろお稽古の方もお見えになる頃ですので、続きはまたの機会にお話しいたします。

今年に入り、宗心宗匠の奥様が御逝去なされました。不出来な弟子でございましたが、少しだけ思い出話をさせていただきました。宗匠の元で、「ボクちゃんけしからんね」と、お話しください。

ご冥福をお祈り申し上げます。

第3回 Hot ほっと 茶時間 ティータイム

賛助会員の皆様の活動や日々のお茶とのかかわりを紹介するこのコーナー。今回は、宗瑞宗匠の頃から会を継続されています清翠会です。

平成四年、宗瑞宗匠が茶道「三斎流」の精神を少しでも市井の人に普及させるため、近隣の女性二十名ばかりにお声をかけてくださり清翠会が誕生しました。

私の手元に残っている例会の資料は、宗瑞宗匠の直筆でこと細やかに茶道や禅の精神が記され、宗瑞宗匠の誠実なお人柄が偲ばれます。三十数年が過ぎ、紙は色褪せてはいますが、今でも私の大切なテキストです。

宗瑞宗匠がご逝去され、お悲しみを癒やされぬ中で数ヶ月後には宗育宗匠が清翠会を継承存続なさり、現在十二名の会員に月一回の例会を開いてくださっています。美味しい濃茶や薄茶をいただき、お床・お軸・お道具を拝見しつつ、お茶にまつわる歴史や禅語などユーモアを交えてのお話は楽しく、何よりもお道具の取り合わせの妙に感じ入るひと時です。

宗浦家元には、初釜や朝茶にお招きいただき、身の引き締まる空間に茶道の奥深さを享受いたします。私は、幸運にも今年の初釜に宗浦家元の色紙「一味友」を賜りました。禅語「清坐一味友」。友と一つの釜の茶を共に味わい心も清く一つにとのお話でした。

宗浦家元の教えのお言葉と思い、これからの清翠会の座右の銘として心に留めておきたいと思います。

ここ数年コロナ禍の中ではありますが、私たち会員は清翠会でいかに癒やされたかを記したいと思いました。

（秦　久里）

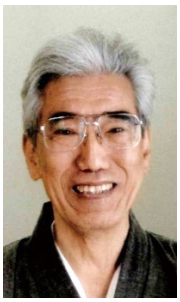
清翠会の皆さん

第8回 先達探訪
～三斎流の先生を訪ねて～

十二月初旬、九曜会常任理事をなさっています大平晴之先生のお宅にお邪魔いたしました。

ご挨拶をすると早速、お茶室にて大平先生のお点前で、お手製のお菓子とお茶をいただきました。

その後、原稿・写真や会記、思い出のお道具・掛け軸を準備してお話してくださいました。（以降、原稿より抜粋）


大平晴之先生

◆お茶を始めたきっかけは？

茶を学ぶ

お茶との出合いは、家の近所にお茶の先生の家があって、姉や兄が茶道を習い始めて、四季折々の茶会の準備等に何度も駆り出されたのがそもそもの始まりである。

戦後の物資不足の時期「オヤツ」といってもろくなものもない時代に、庭の掃除の手伝いに行けばお菓子と一杯のお茶が飲ませてもらえた。お茶はどうでもよかった。お菓子との出合い、これが最高の魅力となった。

何度も何度も駆り出され、四季を問わず祥山宗匠自ら素足で庭に下りて草を一本一本抜き取って掃き清め、シットリと打ち水をされ、掃除の仕方を見様見真似で覚えた。苔の上に下駄や草履で上がれば一喝される。苔が剥がれるからである。一片の塵もない寂とした清々しい庭、そこに一枚の葉がハラハラと散る。これを取ろうとすると宗匠は「晴ちゃん！それは取らんでええ、あんまり綺麗にすると風情がナーナアーがな」この言葉は「掃除の極意」に触れた思いがした。いつの頃からか掃除の後、足を洗って上がれと言われ、西の茶室で稽古が始まった。

祥山宗匠の指導は厳しく、浴衣でも何でも良いから着物を着て来いと言われ、玄関を入った時から非常に緊張し、作法を間違えると黙って自分の膝を「ポン」と叩かれる。これは良い方で、白扇や菓子箸や煙管が投げつけられた事もあった。稽古が終わって帰る時には着物が汗でビショビショになる程であった。それだけ一生懸命に教えてくださった。又、暇を見つけては、山や海、神社仏閣等へ野点に出かけ一日を楽しんで帰った事が幾度もあり、懐かしい思い出である。

◆宗瑞宗匠との思い出は？

宗匠の得度

昭和五十一年九月十二日正午、台風十七号が荒れ狂う最中、寸断された道を探し、最悪の場合は徒歩でも…と「宿志の機は、今をおいて再び得難し」の大決意のもと老宗匠、妻や子達、少数の門人、一人吾子の身を案じ目を潤ませて見送っていた老母の傍らで、私も胸に熱い塊がこみ上げるのを禁じ得なかった。まる一日遅れて得度式に参列すべく出発した我らもまた、台風の余波の中ズタズタの道で通れる唯一筋の道を探し辿った。翌十四日、祥福寺三門をくぐり見上げた空は、夜来の風雨がカラリとあがり澄み渡った青空、好天気であった。玄関に入り来意を告げると、宗匠が出て知客寮と隠寮に案内されお茶をいただいた。

本堂正面祭壇に向かって、すぐ左の長机の上に三具足、右上手が国王の座、その下手父母の座、左下手に鎮守と席札があった。私以下四人が国王の座から父母の座に案内され着座。直日（禅堂雲水の指導者）以下二十一名の雲水が鎮主の席に座り、知客さんの後に身を清め白衣白足袋の宗匠（予め剃髪して後頭部にチョコンと髪が残してあった）、そして侍者の先導で老大師、隠侍の順に入場、厳かに得度式が始められた。

国王に、父母に鎮主に別れを告げ、合掌稽首し無始却来の罪障を懺悔して読経の中、老大師のお手により三回に剃刀を当てられ、そして、仏前にお供えされた無垢の法衣と安名（道号・祥峯、諱名・宗瑞）を授かり、あらためて法衣を身につけ、佛・法・僧に帰依し礼拝して式は滞りなく終わった。

◆印象に残ったお茶会は？

三斎公三百三十年忌記念茶会

昭和四十九年十月二十七日

於　椿山荘

木春堂で無文老師の導師で法要、高樋宗祺宗匠の献香、祥山宗匠の献茶式。無茶庵で濃茶、残荘で薄茶が出雲担当。残月が御家流の香席。松庵と中の間で東京担当の濃茶、薄茶席が設けられた。

主なお道具は、永青文庫の重文級のお宝で、めったに見られるものではなく大変に気を遣った。この時のお香が勅命「白菊」。香木を削った跡に使用年月日と使用目的が墨書されていると聞いた。

当日は、朝から雨で席の移動も大変で色々なハプニングが起こり、宗匠から怒られたり新調した紋付の紋が雨で流れたり大変だった。

私どもは、残荘で献茶式場の道具を移して長板一段の天目点前で奉仕をして帰り、記念に茶碗と天目台を頂いて家宝としている。

この茶会で、初めて一休宗純筆

一行「諸悪莫作衆善奉行」七佛通戒偈に出合っているが、点前や後片づけ等でじっくりと見ていない。

第十二回明治村茶会

昭和五十三年五月十二・十三日

於　明治村

全国の美術館が交代で担当して行われるお茶会で、第十二回は学習院長官舎で永青文庫の担当となり、観翠庵に奉仕を申し付けられ宗瑞宗匠他四名で奉仕して帰った。

本席の床の一休宗純筆の一行「諸悪莫作衆善奉行」七佛通戒偈に再会し前に座った時、身震いする程深い感銘を受けた。気迫の籠った薄墨の筆を一気に書き下したこの一行は、正に時空を超えて一休禅師に対座した思いがしたものである。善の字が書き落とされていて後で脇に小さく書き添えられてあるのを、利休が数寄に入りたりとほめたと云う逸話が残されている。又、流祖三斎公作二重切花入、その父幽斎公の茶杓等を横井先生と二人で展観席にこの手で飾った時は、体内の血が逆流するかと思うほどの感激で、一生忘れることが出来ない思い出である。

◆後輩へのメッセージ

茶の湯とは

口にて伝え眼に伝え
心に伝えて　一筆も無し

昭和五十年十月十日　三斎流家

元相続、観翠庵古喜寿祝賀茶会を記念して、宗瑞宗匠が祥山宗匠の記録を収録して「三斎流道統継承に想う」と云う小冊子に残しておられる。三斎流を学ばれる人は、ぜひ一読されたら良いと思う。

稽古の時はとにかく一生懸命に覚えて帰り、後で自分の分かりやすい記録を残すように教えられた。

茶道ほど時間と人との出合いを大切にするものはない。客に対する亭主の思いやり、客として来て「自分達の為に、まあ！これだけの心配りをしていただいて勿体ない」と思う気持ち、口に出さぬ無言の思いやり、これを感じ取ることの出来る心と意思の疎通が生まれる。私は、この感じ取ることの出来る心を持ちたいと、これを身体で受け止めようと努力している。今この一時はもう巡ってこない。終生巡り会うことの出来ない大切な時「一期一会」、これを大切にしたい。

お手製のお菓子、お点前で

お茶とは、お客様をおもてなしする心と作法を学ぶものと感じ、これを追求すれば終わりがなく、自分自身を研磨する道となり、終生の修行となって今も続けている次第です。

◆大平先生にはお忙しいところご協力頂き、心よりお礼申し上げます。先生の益々のご健康をお祈り申し上げます。

（堀江紀子）

郡上八幡 日吉神社で献茶

令和五年四月十六日（日）

岐阜県郡上市八幡町の日吉神社で、宗浦家元による献茶式が執り行われました。

日吉神社では、献茶式が行われるのは初めてで、例大祭の期間中ということもあり多くの人が見守る中、厳かに営まれました。

近くの旅館三冨久では、立礼による拝服席が設けられ、岐阜の聴雨会の皆さんがおもてなしされました。

九曜会からは十五名が献茶式に参列しました。久しぶりとなる研修旅行は二日間の日程で、初日は徳川美術館の「大蒔絵展」を拝観し、下呂温泉「水面館」で宿泊。二日目は献茶式に参列し、拝服席でお茶をいただいた後、郡上八幡の街並みを散策して、出雲への帰途につきました。

郡上八幡では例大祭の期間中、県重要無形民俗文化財の指定を受ける日吉神社の大神楽も奉納されるなど、様々な神事が行われました。

祝・百寿（大正十三年生まれ）おめでとうございます

伊藤末子先生　（伊藤社中）

ご長寿をお祝い申し上げますとともに益々のご健康ご多幸をお祈りいたします。

祝・米寿（昭和十一年生まれ）おめでとうございます

妹尾怜子さん　（山崎社中）

ご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

1ページより続く

○亀山茶会

令和四年九月二十五日（日）

出雲大社北島国造館

【献茶式】

新秋の国造館御神殿に於いて、国造様の祝詞奏上に続き、宗浦家元により厳粛に献茶が奉納され、参列者一同、世の安寧と人々の健康、五穀豊穣と三斎流の発展を祈願しました。

小林会長から「感染症の拡大も、僅かだが収束へと向かう傾向が見られる。油断はできないが、本日は、三年ぶりのお茶会を楽しみましょう」と挨拶があり、参列者は安堵と期待感を胸に各席を巡りました。

今回は賛助会員の方々の参加もあり、和やかな茶会となりました。

【薄茶席】

北島国造館　奥書院

担当　直門

来客数　一〇一名

鰯雲が浮かぶ過ごしやすい陽気の中、席担当をさせて頂きました。

お家元直筆の軸「千里同風」を掛け、不穏な昨今の世の中の隅々までの平穏を祈り、紅白の秋明菊で献茶式のお祝いを表し、皆様との繋がりを願いました。又、お菓子は席担当の和菓子店主が心をこめて水屋で作る「着せ綿」をご用意しました。

不慣れな者の多い今回の席担当でしたが、皆様からの温かい励ましのお言葉に、今後も一層精進しようと思いました。

（直門　佐野美紀子）

【薄茶 呈茶席】
亀山会館　亀游の間
担当　山本・伊藤社中
来客数　一〇〇名

爽やかな秋晴れに恵まれ、宗浦家元の厳粛な献茶式に参列し、コロナ終息と九曜会員、家族の健康を願って拝礼出来た事に感謝し、穏やかな気持ちになりました。

今回、コロナ感染防止の為に時間や人数の制限をゆったりと取られ、席はとても寛いで、お客様にも喜んで頂けました。又、水屋も充分な消毒と準備をし、皆、心に余裕を持ち茶席に臨めました。

無事、亀山茶会に奉仕出来た事に感謝申し上げます。

（伊藤社中　高野明代）

○松江城大茶会

令和四年十月二十九日（土）
十月三十日（日）
松江歴史館
担当　野々村社中
来客数　二五三名

三年ぶりの大茶会は、一席当り十六客に五〇分というゆとりのある席が計画されました。お点前もお道具拝見の時間も充分にあり、久しぶりの茶会を満喫し、皆様、笑顔でお帰りになりました。

十月末なので長板三段のお点前を致しましたが、お客様の半分はお点前をする者の背中を見る様になり、一考の必要があったと反省しています。社中だけで二日間をやりきり達成感一杯で、皆様に感謝です。

（野々村社中　野々村和子）

○一畑薬師茶会

令和四年十一月二十日（日）
一畑寺　本坊書院
担当　直門
来客数　一八五名

錦秋の中、天候にも恵まれ、三年ぶりに一畑薬師茶会が行われました。

床には、堀内宗心宗匠と宗浦御家元の合筆のお軸「和敬清寂」を掛け、古銅の象耳付き花入に花を活け、お客様をお招き致しました。

コロナ禍で人数、時間の制限はありましたが、立礼で小じんまりとゆったりお茶を楽しんで頂きました。今回は若手を中心におもてなし致しました。点前の三人は初デビューでしたが、堂々と又お運びも凛々しく、今後が楽しみです。

（直門　柳楽隆子）

○三斎忌

令和四年十二月四日（日）
【濃茶 呈茶席】
観翠庵道場　松霞亭
担当　加儀・大野社中
来客数　五三名

薄明かりの樹木の下、ガラス戸の鍵をゆっくり回す。祖堂の障子をそっと開き、三斎公像に「お守り下さいませ」。

祥山宗匠筆「不識」のお軸。三斎公の竹一重切に、葉の数にこだわらず自然のままに椿を添えて。

不束乍ら一生懸命お務めをという長年精進された先生方の謙虚な姿勢。美味しくなあれ、美味しくなあれと濃茶の加減。貴重な体験に感謝です。

（加儀社中　森山佐知子）

【薄茶席】
観翠庵道場　富士の間
担当　山崎社中
来客数　五三名

今年一年のことを語り合えるゆったりとしたお茶会にしたいとの思いで、床に「山雲海月情」のお軸を掛け、三斎忌のお茶席を担当させていただきました。

三斎忌のお菓子といえば味噌せんべいですが、今年は坂根屋さん考案の九曜紋の入った「柚子の香」となり、お参りの皆様に大変美味しいと好評でした。

一席一席ゆったりと和やかな雰囲気のお茶席となりました。

（山崎社中　堀江紀子）

○早春の茶会

令和五年三月二十六日（日）
出雲文化伝承館　松籟亭
担当　山田・下垣社中
来客数　一九三名

早春の茶会は四年ぶりの開催で、コロナ感染予防で人数制限があったため、お客様にはゆったりとした空間で過ごしていただくことができました。各お席で時間いっぱい興味深くお道具を拝見された方が多かったのは印象的でした。

好評だったお菓子の銘は「春敲（しゅんこう）門（もん）」。東風が門を敲（たた）き春を告げるという意味があります。お茶席の随所に春を感じ、楽しんでいただけるよう一同、心を尽くしました。

（下垣社中　児玉宏子）

怡園公御筆「弄花香満衣」

○新樹の茶会

令和五年四月二十九日（土・祝）
【薄茶 呈茶席】
観翠庵道場　松霞亭
担当　杉山・佐藤社中
来客数　九九名

雨に洗われた緑美しい観翠庵道場松霞亭において、呈茶席でございましたが、ゆったりとした一時をお過ごし頂きました。

床は無文老師筆「寂然不動」花入は関精拙老師作「寿老」花は白雲木。凛とした中での和やかな呈茶席となりました。限られた時でしたが、皆様ゆっくり歓談しながら和やかに行く春を惜しみました。

準備や掃除、当日の運営等、皆様のご協力に感謝申し上げます。

（杉山社中　錦織君子）

【薄茶席】
観翠庵道場　富士の間
担当　福間社中
来客数　九九名

今年もまだ、人数制限などコロナ対策をしての茶会になりました。

久しぶりのお点前席担当でしたので、色々と心配もありましたが、炉の最後となるお茶会を席担当の者もお客様も一緒になって楽しめるよう、心掛けました。午後になって少しずつ点前席の時間がずれ込み、お客様をお待たせすることになり、スムーズに流せる工夫がもっと必要だったのではと思っています。

（福間社中　福間喜代美）

○出雲大社大茶会

令和五年五月十六日（火）
出雲大社　神苑
担当　大田・辰村・安来・米子社中
来客数　三二五名

青葉若葉の輝きに満ちた出雲大社で茶会が開催されました。

以前は二日間続けて参加でしたが、コロナの関係で、今年はすべての流派が一日のみの参加となりました。

コロナ前のように予約が無い状態の茶会で、久しぶりであった為緊張しましたが、お客様の「美味しかった」との言葉と笑顔に安堵しました。しかし、反省する点もありました。反省は、今後の課題にして精進したいと思います。

（大田社中　川瀬清恵）

○講習会

令和五年六月四日（日）
今市コミュニティセンター
担当　研修部
参加者数　六〇名

コロナ禍で三年ぶりの講習会。5類になりましたが、半日研修と致し、会場は典子先生のご縁で今市コミセンにて開催致しました。

基本に立ち返り、男性と女性の平点前の研修。御家元様の御指導を頂き緊張感あふれる研修でした。

後半は、御家元様から三斎公晩年の直筆「口切りの茶の礼状」を読みながら御講義頂きました。読みづらい字や意味を丁寧に解説して頂き何とか納得。学生時代に還った様な気分。三斎公の力強い字に圧倒され、先人の足跡を大切にしながら茶の道を歩んで行きたいと思った一日でした。

（研修部　錦織君子）

○青年部さくら会

令和五年三月四日（日）
ハートフルおやま
【ひな祭り呈茶ボランティア】
参加者数　一六名

二年半振りの開催となった呈茶ボランティアでした。利用者の方と一緒に制作出来るよう、紙コップを使ったひな人形作りをしました。久しぶりという事で、利用者の方の様子をスタッフの方に教えていただけたので助かりました。

ひな人形を作った後は、呈茶をしました。利用者の皆様、久しぶりの抹茶を大変喜んで下さいました。今後も引き続き、活動出来ることを祈っています。

（青年部　三島羊子）

ご冥福をお祈り申し上げます

和田貞夫先生（令和五年六月）
長年のご尽力に
感謝申し上げます。

編集後記

本紙ゲラを校正中、和田先生の訃報に接しました。先生には、十回に亘って連載いただき、感謝の意は尽くせません。ご冥福をお祈りいたします。

皆様には、ご多用のところご寄稿くださり、心よりお礼申し上げます。今後も、ご支援ご協力いただきますようお願いいたします。

（広報部）